第 10 回日本甲状腺病理学会総会・学術集会　開催記

令和 5 年 7 月 8 日、第 10 回日本甲状腺病理学会総会・学術集会が、福島県立医科大学　病理病態診断学 橋本 優子を会長に、同大学構内で開催されました。

同大 放射線医学県民健康管理センター特任教授 横谷進 先生による「小児の甲状腺のトピック先天性甲状腺機能低下症と甲状腺分化癌」と題した特別公演で本会が始まり、危険因子とされる TSH 高値以外に、合成障害を生じさせる酵素の機能障害や遺伝子異常そのものによる発がんの可能性について報告がありました。

その後、新理事長 中島 正洋 先生を座長として、歴代理事長　加藤 良平 先生、廣川 満良 先生、菅間 博 先生により 「日本甲状腺病理学会の 10 年の軌跡」 と題してシンポジウムが行われました。本学会の成り立ちやこれまでの活動内容についての報告が相次ぎ、また今後の活動の方向性や課題について、歴代理事長と参加者で共有する場となりました。

福島の桃ジュースで休憩の後、症例検討では、*DICER1* 変異を伴う小児 FT-UMP, 長期経過後の再発を示したびまん性硬化型乳頭癌や術後 3 年で再発を認めた結節内結節型非浸潤性甲状腺結節など希少症例の報告がありました。

一般演題では、超音波画像・肉眼・組織標本で測定した甲状腺微小乳頭癌腫瘍径の不一致性と影響を与える因子、嚢胞形成性甲状腺乳頭癌の充実部径が予後因子として重要であるなど形態測定と臨床像との関連性や Podoplanin 陽性甲状腺癌の臨床病理学的特徴についての報告がありました。次いで福島県・石川県の法医解剖例における甲状腺疾患の検討 －特に甲状腺ラテント癌の頻度について－ の報告が福島医大 法医学教室からありました。最後に特別講演でも取り上げられた「ホルモン合成障害性甲状腺腫の病型別組織学的特徴に関する検討」の発表もあり、臨床の先生方や病理医から、合成障害の原因と病理組織学的特徴に関連性が見いだせるのかなど、非常に興味深い討論や考察が行われました。

午前中には同大学 放射線災害医療センターや放射線医学県民健康管理センターの見学も組まれ、大勢の参加者がありました。非常に内容のある、充実した 1 日となりました。参加、ご協力を頂いた各位に感謝申し上げます。

次第 11 回集会は新理事長 中島 正洋 先生のもと、長崎大学で開催されます。